

## ファージおよび MCP-1の関与

(第四内科)

名取恭子・

湯村和子・内田啓子・本田一穂・

小林英雄・新田孝作・二瓶 宏

〔目的〕ループス腎炎は、多彩な組織像を呈し、病態治療により腎病変の移行も認められる。また腎病変を評価した上での治療が必須でありループス腎炎発症進展に関与する単球マクロファージの腎病変形成の意義を検討した。

〔対象と方法〕未治療の症例もふくむループス腎炎15症例から採取した腎組織を抗 CD68抗体、抗 MCP-1抗体で染色した。臨床的活動性、腎炎の活動性をともに評価した。

〔結果〕未治療の活動性病変を有する腎糸球体には CD68陽性細胞を認め MCP-1が染色された。さらに治療中であっても CD68陽性細胞は少数であるが糸球体に存在する症例も認められた。このような症例では MCP-1は染色されなかった。

〔結論〕ループス腎炎において腎炎発症進展時に MCP-1等の factor を放出しつつ、マクロファージは糸球体に存在し、治療中であってもメサンギウム増殖を誘導する可能性がある。

## 12. 単純ヘルペスウイルス角膜炎に対するアンチセンス療法の研究—HSV-1ウサギ角膜炎に対する効果—

(第二病院眼科)

若松裕子・宮永嘉隆

〔目的〕HSV-1の早期発現遺伝子に対するアンチセンスオリゴ DNA を用いて、ウサギ角膜炎に対する最大無影響量を設定し、HSV-1角膜炎を発症したウサギモデル系での治療効果を検討した。

〔材料と方法〕白色家兎 (2.5kg) の角膜上皮を 27G 針で井型に擦過し、HSV-1天方株を接種した。48時間後に角膜炎の発症を確認後、0.3%、0.1%、0.01%アンチセンスオリゴ DNA 群、アシクロビル群、コントロール群に分け、24時間毎にスリットランプで角膜所見を観察した。所見は 1～4 の 4 段階でスコア化した。

〔結果〕本アンチセンスオリゴ DNA は、溶液、軟膏とも 0.3% が最大無影響量であった。0.3% 溶液は眼軟膏とすることで、さらに効果的であった。

## 13. 活性化した MBP 特異的 T 細胞に反応する T 細胞株

(神経内科)

太田宏平・清水優子・市川久恵・

植田美加・秋山尚子・岩田 誠

〔目的〕ヒトの免疫系における調節機構の解析のため健常人末梢血から MBP 特異的 T 細胞に反応する T 細胞株の樹立を試みた。

〔方法〕健常人より MBP 特異的 T 細胞株 (F5) を確立した。次に同一対象末梢血から活性化した F5 を抗原としてこれに反応する T 細胞株の樹立を試みた。

〔結果〕F5 に反応する T 細胞株は効率よく得られ、*in vitro* stimulation を開始した全ての培養系において F5 に対する反応を認めた。長期培養を継続した 2 株は CD3<sup>+</sup>、CD4<sup>-</sup>、CD8<sup>+</sup>、 $\delta 1^{-}$ 、HLA-DR<sup>±</sup>であった。これらの T 細胞株は自己の feeder 細胞、MBP 抗原、刺激前の F5 に対しては何の反応も示さなかった。しかし、MBP で刺激後の F5 に対しては強い [<sup>3</sup>H]thymidine の取り込みを認めた。また、逆に F5 との混合培養では F5 の MBP に対する反応を約 60% に抑制した。

〔結論〕ここで確立した T 細胞株は活性化 T 細胞に対する T 細胞株と考えられ、ヒトにおいてもこのような T 細胞の関与する調節性機構の存在が示唆された。

## 14. HB ワクチン非応答性における抑制性 T 細胞の役割

(消化器内科)

木村 知・飯塚愛子・山口尚子・

宮園裕子・清水 健・石川賀代・

小島真二・西川瑞穂・関谷仁美・

磯野悦子・春田郁子・徳重克年・

長谷川潔・山内克巳・林 直諒

HB ワクチン非応答性における抑制性 T 細胞の役割を解明することを目的として以下の実験を行った。HB ワクチンを接種した健常者の末梢血リンパ球の HBs 抗原に対する反応性を検討したところ、HB ワクチンに対する高応答者では、末梢血リンパ球の HBs 抗原に対する反応は高く、非応答者 (NR) では低い傾向を示した。しかし、NR